林泰輔と王国維 — 出土史料研究黎明期の日中学術交流

藤　田　高　夫

Hayashi Taisuke and Wang Guowei

FUJITA Takao

Hayashi Taisuke (1854–1922) was one of the Sinologists who flourished in the dawn of Oriental studies in Japan. He was essentially a philologist of Chinese Classics, but he devoted himself to the study of ancient oracle bone inscriptions in his later years. Shortly after he started the study of inscriptions, Wang Guowei (1877–1927), one of the greatest scholars of early Chinese history in Twentieth century, came to Japan. Wang acquainted himself with many Sinologists in Kyoto University, but he had no acquaintance in Tokyo except Hayashi. From the summer of 1915 to January of 1916, Hayashi and Wang exchanged their views about some technical terms in ancient Chinese texts, using Chinese classics and ancient inscriptions. Their association was very short, but both of them had a common hardship as pioneer in the research of excavated materials of early China, which made their academic exchange monumental.

キーワード：林泰輔、王国維、出土史料、甲骨文字、日中学術交流

1．はじめに

林泰輔（1854－1922）は、現在ではあまり論及されることはないけれども、日本における東洋学創成期を代表する学者の一人である。一方、王国維（1877－1922）が中国学術史上に占める地位は贅言を要しない。この両者に羅振玉（1866－1940）を加えた三者の間には、羅・王両氏の来日を挟んで、短期間ではあるけれども非常に有意義な学術交流が持たれた。本論文は、その背景と意味を考え、百年前の日中学術交流の一面を描き出すことを目的としている。

2．林泰輔の略歴と学問

まず、林泰輔の略歴をみておこう[1)]。

1）林泰輔の経歴については、江上波夫編『東洋学の系譜』（大修館書店、1992年）所収の鎌田正による評伝が最も有用である。また『支那上代之研究』（進光堂、1927年）の巻頭に寄せられた井上哲次郎、市村瓚次郎、岡田正之、瀧川亀太郎の序は、林をよく知る人々によるもので、その人となりをよくうかがうことができる。

林は1854（安政元）年9月26日、千葉県香取郡常磐村に生まれた。郷土の朱子学者並木栗水に学んだ後、1887（明治20）年、東京大学古典講習科漢書課を卒業した。頻繁な学制改革のさなかにあって、同古典講習科はわずか2度の学生募集を行ったに過ぎなかったが、入学者のほとんどなかった本科漢学科とはちがって多くの人材が集まり、林の同期生には市村瓚次郎・瀧川亀太郎・岡田正之などがいる。1889（明治22）年、山口高等中学校に赴任し、1896（明治29）年、東京帝国大学文科大学助教授となったが、翌年病気のため退職した。1899（明治32）年、東京高等師範学校講師に嘱託され、1908（明治41）年同校教授に任ぜられた。1916（大正5）年には、前年出版の『周公と其時代』に対して帝国学士院恩賜賞が授与された。1922（大正11）年4月7日69歳で死去し、郷里常磐村に葬られた。

林泰輔の研究活動は、古典講習科卒業の1887年に『東洋学会雑誌』に掲載された「朝鮮文芸一班」から開始され、死去するまでの36年間に、著書9冊、論文67篇をものし、これ以外に刊行されなかった著作の原稿が9種存在する。以下に、代表的著書を出版年次順に列挙し、さらに出版できなかった未刊稿を掲げよう。

『朝鮮史』5巻	1892年
『朝鮮近世史』2巻	1901年
『漢字要覧』1巻	1908年
『朝鮮通史』1巻	1912年
『四書現存書目』1巻	1914年
『周公と其時代』1巻	1915年
『論語年譜』2巻	1916年
『亀甲獣骨文字』2巻	1921年
『支那上代史之研究』1巻	1927年（没後に刊行）
『上代文字の研究』8巻	未刊（学位論文）
『論語源流』2巻	未刊
『論語彙考』	未定稿
『周秦諸子考』	未定稿
『日本経解総目録』5巻	未定稿
『日本諸子解目録』1巻	未定稿
『亀甲獣骨文字（巻三）』1巻	未定稿
『亀甲獣骨文字表』6巻	未定稿
『省別金石図志』	未定稿

上記の代表的著作を見ただけでも、林泰輔の学問の概要はうかがうことができよう。同窓であった市村瓚次郎は、林が切り開いた学問領域として、朝鮮歴史の編纂、中国古代史の研究、金石文字の研究、の3点を挙げている。同じく瀧川亀太郎は、林の学問を、朝鮮史の研究、日本経解の蒐集、諸子考の編纂、唐虞三代文献考の著作に大別している。また岡田正之は「世の経学者は訓詁の学に精しきものは、

性理の義に疎く、性理の義に明なるものは、攷証の法に乏しく、各々一方に偏するを免れず。然るに博士（＝林泰輔）の学は、全く三者を該ね、加ふるに史学を以てしたるものなり。語を換えて之を言へば、経と史とを経緯して成れる一大経学なり」としたうえで、林の研究の歩みを、四つの段階（四変）に区分している。すなわち、古典講習科において考証学の立場を取るようになったのを第一変、朝鮮史の編述を第二変、経書のみならず小学にも渉猟して三代の制度文物を考究したのを第三変（『周公と其時代』はその代表作である）、そして甲骨文もふくめた金石の研究を第四変、としている[2)]。

三者の評価には若干の違いはあるが、今日的視点から学術史上の林泰輔の業績をまとめれば、次の3点となるだろう。

①近代日本における朝鮮史研究の開拓者

②漢学の伝統を踏まえた経学者

③文献と出土史料を用いた中国古代史研究の先駆者

著作の刊行年次を見れば明らかなように、業績としては①の朝鮮史研究が先行する。しかし、林が終生研究に邁進したのは②の経学の分野であろう。岡田正之の「経と史とを経緯して成れる一大経学」という評言が、林泰輔の学問の核心部分を最もよく捉えているであろう。また林の心性としても、伝統的経学の立場に親近感を持っていたと思われる。たとえば白鳥庫吉の堯舜禹抹殺論（『東洋時報』131号、1909年）に対する林の反駁「堯舜禹抹殺論について」、「再び堯舜禹の抹殺論について」（1911～1912年。いずれも『支那上代之研究』に所収）を見ると、経典上に重要な位置を占める堯・舜・禹を架空の存在とする白鳥説への、経学者の反発という側面が表面化しているようであり、ここに林泰輔の学問の中核があったと考えられる。林の代表的著作である『周公と其時代』も、孔子が理想とした先聖である周公の思想が、『周礼』『儀礼』『周易』にいかに反映するか、という問題関心から著されたものであり、このことも林の学問の性格を物語るものであろう。

林泰輔の学問を、そのようなものとして捉えると、③の分野、すなわち彼がその後半生に金石学に傾注したこと、とりわけ甲骨文研究に精力を注いだことは、一見奇異なことに感じられるであろう。節をあらためて検討してみたい。

3．甲骨文への林泰輔の反応

劉鶚『鉄雲蔵亀』（1903年）の刊行によってその存在が日本にも知られるようになった甲骨文に対して、林泰輔はきわめて早い段階から関心を示していた。林が『鉄雲蔵亀』を手に取ったのは、1906～7年ころのことと思われる[3)]。1909（明治42）年、『史学雑誌』誌上に3回にわたって分載された「清国河南省湯陰県発見の亀甲獣骨に就きて」は、甲骨文の史料的価値を日本で最初に論じた論文である。『鉄雲蔵亀』の刊行から6年を閲しているのは、林が甲骨の実物を実見する機会を得るのを待っていたからである。

2）前注1参照。

3）1909年刊行の「清国河南省湯陰県発見の亀甲獣骨に就きて」の中で、『鉄雲蔵亀』について「余は二三年前その書を見て、支那古代の文字攷究上に於ては極めて貴重なる材料を知り…」と記している。

同論文中で林は「頃者その内百数十片の本邦に伝来するありて、その実物を見、余も亦その十数片を獲て、子細に之を討覈するに、…真に旧志の足らざる所を補ひ、漢唐諸儒の謬説を一掃することを得べし」、「余はその実物を一見して、決してその偽贋の物にあらざることを信ぜり」と述べ、甲骨文の史料的可能性を力説している。

この論文の真価を理解するには、当時の日本の学界における甲骨文への視線を知る必要がある。研究蓄積のあった両周金文は措くとしても、先秦時代の非文献史料への評価は決して肯定的なものではなかった。前例のない新出史料である甲骨文に対しては、その真贋さえもが問題となり、一部には劉鶚による偽造を疑う声さえあったのである[4]。後に林泰輔は1918（大正7）年4～5月に中国を訪問したおり、安陽に足を伸ばし[5]、甲骨の出土地を実見しているが、その帰国報告のなかで「併ながら支那人は偽物を拵えることが巧で、従来無かったやうな物を偽造して旨く賣付けるとそのやうな事をやりますから、果して鉄雲蔵亀に書いてあるものが真物であるか偽物であるかは頗る疑って居ったのであります。それから後、本郷の文求堂が彼の亀甲獣骨を百個ばかり買って来て、それで人に売りました。私もそれを十個ばかり買って、初めて実物を見たのであります。実物を見るに及んで、是は偽物ではなからう。本当のものであらうと云うことを信じたのであります」、「私の友人などでは随分之を疑った者がありまして、そんなものは当てにならぬものであると云ふやうな事を段々言はれたこともありました」と当時を振り返って述べている[6]。

そうした状況にあって、林泰輔は古今の文献を猟渉して甲骨が殷の遺物たることを力説し、金文と対照しながら甲骨文の釈読を試み、卜占の具体的方法にまで論究している。林の甲骨文への傾注は、先秦文献の真実性を探る上での貴重な第一次史料という認識が背景にあるのだろう。周初と想定される諸制度・文物の真実性の探究をめざした『周公と其時代』に見られるように、周に先行する殷の同時代史料である甲骨に対しても、文献史料の伝える情報の真否を探るための材料としてとらえる態度で臨んでいたのである。この林の業績によって、甲骨文の史料的信憑性を疑うものはさすがにいなくなったといわれる。しかしながら、甲骨は依然として一部コレクターの珍重するものであり、これを歴史研究に用いるものはほかになかった。林はなお「孤墨を守る」ほかなかったのである。

4．王国維の来日と林泰輔との学術交流

上記の『史学雑誌』論文から二年後の1911年11月、王国維が羅振玉らとともに来日し、京都に滞在する。以下、行論の都合上、簡単な関係年表を示しておこう。

4）史料としての甲骨文に対する当時の冷淡な反応は、神田喜一郎「貝塚教授の『甲骨文字』図版篇を手にして林泰輔博士を憶う」（『敦煌学五十年』所収、筑摩書房、1970年）参照。

5）『史学雑誌』掲載の論文で甲骨の出土地が「河南省湯陰県」となっているのは、当時は安陽出土という情報が伝わっていなかったからである。

6）林泰輔「殷墟の遺物研究に就て」（『東光』第14巻第5号、第6号、1918年。林泰輔『支那上代之研究』所収）。なお林泰輔はその後中国にいた友人を介して、甲骨を600片ほど入手している。

1911年11月	王国維・羅振玉来日
1912年	王国維「簡牘検署考」・羅振玉『殷墟書契考釈』
1914年	羅振玉・王国維『流沙墜簡』
1915年	王国維「洛誥箋」（『国学叢刊』）
	林泰輔「国学叢刊を読む」（『東亜研究』5－9）
	林泰輔、京都にて王国維に会う
	羅振玉・王国維から林泰輔宛「答書」
	林泰輔「羅王二氏の王賓に関する答書」（『東亜研究』5－12）
1916年1月	王国維「再與林博士論洛誥書」
1916年2月	王国維、上海へ帰国

甲骨文、両周金文さらには『説文』の研究を開始していた林泰輔にとって、羅振玉・王国維の来日は、干天の慈雨のごときものとなる。林が王国維を知ったのは、1915年に羅振玉が復興した『国学叢刊』誌上に掲載された王国維の論考によるらしい。「明堂廟寢考」「鬼方昆夷玁狁考」「三代地理小記」などの諸論考において王国維が甲骨・金文を用いて展開した説に、林は膝を打って賛意を示し、上梓したばかりの『周公と其時代』における自説の不備を率直に認めている。同時に、「洛誥箋」（後、『観堂集林』巻一に「洛誥解」として所収）については、2点について疑義を抱いている。『尚書』周書洛誥篇のなかの「王賓殺禋咸格、王入太室祼（王賓　殺禋咸な格り、王　太室に入りて祼す」に関して、一つは王賓の「賓」字の解釈について、もう一つは「祼」の礼についてである。王国維の解釈では、王賓とは文王・武王が亡くなったのでそれを賓とよんだものであり、殺は犠牲を殺すこと、禋は禋祀すなわち柴燎のこと、そして王が太室に入って祼の礼を行うということになる。

林は『東亜研究』第5巻第9号誌上に「国学叢刊を読む」と題するレビューを掲載し、王国維の研究を高く評価して紹介するとともに、自らの疑義を発表した。その前後（おそらくは上記レビューの脱稿後）に、林は京都に赴き、日付は定かでないが王国維と面会している。そこでどのような会話が行われたのか、現在では知るすべがないが、あるいはここで林は自著『周公と其時代』を王国維に与えたのかもしれない[7]。

その後、羅振玉・王国維から林泰輔宛に、林の疑義に対する回答が寄せられ、それが再び『東亜研究』第5巻第12号誌上に「羅王二氏の王賓に関する答書」として掲載された。羅振玉からも書簡が寄せられたのは、「国学叢刊を読む」において、羅振玉の『殷墟書契釈考』の「王賓」に関する説に言及していたからである。羅振玉、王国維ともに、甲骨金文の字形から「賓」字の解釈を詳論しており、林は「賓」字の疑義については、羅・王の正しさをほぼ承認しているが、もう一つの「祼」についてはなお議論を続けている。林の当初の解釈では、「祼」は地に灌ぎ神を降ろす祭りであり、それを太室に入って行うのでは順序がおかしいという疑義を呈したのであったが、答書のなかで王国維は、「祼」は秬鬯を盛っ

7）王国維から林泰輔に宛てた最初の書簡に「夏間駕蒞京都、獲親道範、嗣読大著周公及其時代、深佩研鑽之博、論断之精、於攷定周官及儀礼二書編撰時代、尤徴卓識、誠不朽之盛事也」と記している。

た酒で酒宴をなすことであり、神を降ろすためだけに行われるものではないことを、先秦諸文献を引きながら論証している。これに対し林は、王国維の説く「祼」の多義性を、地に灌ぎ神を降ろすことを本義たる第一義、神に歆するのを転義たる第二義（洛誥はこの義）、賓客に用いるのを第三義としたうえで、王国維の説によれば周の中世以後において第一義が多く用いられるのにもかかわらず、周初の洛誥の時代に第二義が用いられたことになり、その不自然さを指摘している。この林泰輔の疑義に対して、王国維は再び林に書簡を送り[8]、「祼」字をもう一度考証して林の疑義に反駁している。

王国維が林泰輔に送った書簡および林の反駁は非常に長文にわたり、かつ論点も古文字学、訓詁学上のきわめて専門的なものであるため、ここで原文をあげて紹介することはしない。上記『東亜研究』、林泰輔『支那上代之研究』および王国維『観堂集林』、呉澤主編『王国維全集　書信』（中華書局、1984年）などに収録されたものを参照されたい。ただ、ここで指摘しておきたいのは、王国維の古史研究は、京都滞在中に本格化したということ、さらにその古史研究は出土資料と密接な関係をもって開始されたということである[9]。滞日中の最初の論考である「簡牘検署考」は、出土が伝えられた漢晋木簡を意識して書かれたものであるし、羅振玉との共作である『流沙墜簡』は、スタイン将来の敦煌簡に対する精緻な考証である。羅振玉の『殷墟書契考釈』においても、王国維は多大の貢献をなしているし、金文研究もこの頃から本格化している。

この時代の王国維の論考を読むと、彼の古史研究の方法論として名高い「二重証拠法」、すなわち文献上の証拠と地下からの証拠を相互に参照するという方法は、すでに明確な姿を現している。その意味で、王国維の出土史料研究は、京都時代に開始されたということができる。一方で林泰輔は、古代史研究における甲骨文の史料的価値をいち早く認めながら、その賛同者をなかなか得ることのできない状況にあった。出土史料に対する反応の乏しさを嘆く、という点では、京都における王国維も同様であった。名著『流沙墜簡』を脱稿した直後の1914年7月、繆荃孫宛の書簡のなかで王国維は次のように言う。

> 歳首與蘊公（羅振玉）同考釈《流沙墜簡》、並自行写定、殆尽三四月之力爲之。此事関係漢代史事極大、並現存之漢碑数十通亦不足以比之。東人不知、乃惜其中少古書、豈知紀史籍所不紀之事、更比古書爲可貴乎。…使竹汀先生（銭大昕）聟操觚、恐亦不過如是。

簡牘だけでなく、甲骨・金文についても、王国維の周囲にいた京都の学者たちのなかにこれを専門とする研究者がいなかったという状況もあった。周知のように、王国維と親交をもった学者は、ほとんどが京都帝国大学の学者たちであった。そのなかで、東京の学者である林泰輔との学術的交流は、極めて例外的な現象である。しかしながら、中国古代史研究において両者が行おうとしていたことの方向性あるいは置かれていた状況の類似性を考えるとき、林泰輔と王国維との学術交流は、出土史料研究の黎明期にあって、日中両国の牽引者の幸運な出会いであったと見ることができるのである。

---

8) 王国維『観堂集林』巻一「再与林博士論洛誥書」。

9) 佐藤武敏『王国維の生涯と学問』（風間書房、2003年）第四章「王国維の国学とりわけ歴史学　（二）滞日中の古史研究」参照。

5．結語 — 出土史料研究の先覚者

王国維は1916年２月に帰国する。その後、林泰輔と王国維との間に学術的交流があったことを示す史料は残されていない。おそらくは没交渉に終わったのであろうと思われる。しかし、出土史料の意義と可能性を深く認識していた点で、両者は同じ方向を目指していた。

王国維はその晩年に彼の古代史研究の方法論的総括ともいえる『古史新証』の総論において、次のように述べる。

> 吾輩生於今日、幸於紙上之材料外、更得地下之新材料。由此種材料、我輩固得拠以補正紙上材料、亦得証明古書之某部分全為実録、即百家不雅馴之言亦不無表示一面之事実。此二重証拠法、惟在今日始得為之。雖古書之未得証明者、不能加以否定、而其已得証明者、不能不加以肯定、可断言也。

いわゆる二重証拠法の宣言である。その上で、紙上の材料として、(1)尚書、(2)詩、(3)易、(4)五帝徳及帝繫姓、(5)春秋、(6)左氏伝・国語、(7)世本、(8)竹書紀年、(9)戦国策、(10)史記を挙げ、地下の材料として(1)甲骨文字、(2)金文を挙げている。

一方、林泰輔はその最後の論考として、死の前年の1921（大正10）年に「支那上代の研究資料に就て」（『斯文』第３編第２号および第３号）を発表している。そこで林は、「文籍以外に就て上代研究の資料となすべくして今日迄に世上に知られたるもの」として、(1)亀甲獣骨文、(2)銅器文及び銅器、(3)貨幣及び兵器古鈴、(4)石器及び玉器、(5)土器、(6)刻石文を挙げ、それぞれを概観した上で次のように結ぶ。

> 右の如く支那上代の文籍と他の資料とを比較対照して之を討究せば、種々の事柄に於てその一致せしものを見出すことは決して難事に非ざるなり。元来何等の関係なく別々に各方面に伝りしもののかくまで一致することは、即ち当時の真相を伝ふるものにて実に確乎たる憑拠を数千歳の後に遺したるものといふべし。古代の文籍豈悉く後世の偽託ならんや。世の論者宜しく眼界を濶大にし、文籍に就ては表裏両面より精密なる観察をなし、又博く資料を文籍以外に求め、参伍錯綜して之を考覈すべし。徒らに空想的仮説に耽りて快を一時に取ることは、たとひ其の説巧妙なりとするも決して後世の識者を欺くこと能はざるなり。

両者はともにその最晩年に新出の出土史料がどのような意味を持ち、どのように研究すべきかを論じている。そこで述べられたことは不思議なほど軌を一にしている。また林泰輔・王国維が上記論文の出土資料の各論において行った「予言」が非常によく似ており、かつそれがことごとく的中していることは、両者の卓絶した力量を如実に物語っているだろう。林泰輔と王国維との学術交流は、きわめて短期間のものに過ぎなかった。しかしそれは、今日にいたるまで大きな発展を遂げてきた出土史料研究の歴史において、記念碑的意義を持つものであったといえよう。